



コストダウン圧力に対応するためには ～イタリア・ボローニャで見つけた新たな活路～

ジェットロ富山 所長 温井 邦彦

最近、ものづくりの地域には暗い話題が多い。なにか明るい話はないものだろうか。

トヨタは昨年12月21日、系列部品メーカーに部品価格の3割もの引き下げを要請した。トヨタがこれほど大幅な引き下げを求めるのは10年ぶりだそうだ。過剰品質への対応もあるという。早く言えば低価格車に高級車と同じ部品はいらないうことだ。背景には円高と低価格でトヨタと競合し始めた中国、インドといった新興メーカーの台頭がある。部品メーカーへの価格引き下げ要請を行っているのはトヨタだけではなく、自動車関連の部品産業を抱える富山県には大きな問題である。もうひとつ悪いニュースがあった。日銀が1月14日発表した2009年の国内企業物価指数は、12ヶ月連続のマイナスで、前年に比べて5.3%低下し、1960年に統計を取り始めて以来の過去最大のマイナス幅となった。国内企業物価指数は国内での生産品の企業間取引価格であり、製品の出荷価格の下げ圧力、コストダウン圧力が継続してかかっていることを意味する。これも富山県の産業にとっては一大事である。国内だけでコストを削減する手段には限りがある。中国など海外へ行ってコストダウンする以外にないものか？もし国内に残りたいなら、「高付加価値のものを作る、量から質へ転換すべし」というのは正攻法であるが、言うは易しである。

先日イタリア・ボローニャの製薬機械メーカーを訪ねて感じたことがあるので紹介したい。工場の外見は富山でもよく見る工場風景だ。従業員1,600名、売上高500億円の規模である。決して大メーカーではないが、海外からの顧客の訪問が絶

えないようで、社内にはビジター専用の広い立派なレストランがあった。われわれ以外にも欧州から2組の来客があった。包装機械には洗浄、充填、調製、包装などの工程があるが、それぞれの工程で中核となる装置・部品がある。同社は中核装置をすべて自前で作っているわけではない。自社でできないものは積極的に外部で調達する。同社の優れたところはなにか。最先端の中核装置の性能を最大限に引き出すコーディネートをし、ひとつのラインとして性能を最大化することである。中核装置それぞれが最新の技術と能力を持っていても、一つの工程が他の工程との調整がうまくいかず半分的能力しか出せなければライン全体とすれば能力は半減してしまう。各装置の製造メーカーは性能向上に力を注ぐが、それを最適化する役回りも必要なのである。それは日本のものづくりが得意な（だった）分野かもしれない。同社の製造ラインには中国のメーカーを含め、世界の手製薬メーカーの名前のラベルが貼った機械が工場内に所狭しと並んでいた。ちなみに同社の輸出比率はなんと売り上げの94%に上る。

同行したメンバーからひとつ指摘があった。日本だと法令で定めてある基準・規格が厳しくてこうはいかないところがあるという。冒頭トヨタの過剰品質の話に通じるところがある。法令で定められた基準・規格が厳しいからこそ日本の品質を維持している面も否定できないが、コスト競争力で新興国に対抗するためには、必要以上に法令を厳格化していないかという点などももう一度再点検する必要があるのではないだろうか。

以上